

令和 5 年 6 月 20 日現在

機関番号：13801

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K12500

研究課題名（和文）新疆の形成とウイグル民族問題に関する調査研究

研究課題名（英文）Research on the Formation of Xinjiang and the Uyghur National=Ethnic Problems

研究代表者

大野 旭（Akira, Ohno）

静岡大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：40278651

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：ウイグル人など中央アジアの人々がいう東トルキスタンをいつ、どういう経緯で「新疆」と呼ばれるようになったのか。「新しい疆域即ち領土」としての新疆が出現したことでどんな民族問題が発生したのか。こうした疑問について答えようとして、本研究は歴史人類学の視点から進められてきた。東トルキスタンを新疆にしたのは満洲人の清朝時代のことで、ウイグル人は清朝の臣民として高度の自治を享受していた。清朝が崩壊すると、この地の住民は独立建国を目指したものの、国際関係との関連で失敗した。中華人民共和国はウイグル人の権利を否定したことで、民族問題は激化した。こうした近現代史について、中央アジアの視点から解明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

民族問題は国際問題である。とりわけ隣国の中国で勃発している民族問題はどれも日本と何らかの形で連動している。新疆ウイグル自治区におけるウイグル民族問題は、その典型的な事例である。日本の数多くの企業が新疆と繋がっているだけでなく、文化・歴史の面でも、いわゆるシルクロードを通して新疆と関連性を有している。新疆の民族問題に関する本研究は、日本が国際社会で建設的な役割を果たすのに有用である。

研究成果の概要（英文）：When and how did the part of the Central Asian region of East Turkestan come to be called "Xinjiang"? What National=ethnic problems arose with the emergence of Xinjiang, meaning "new territory"? This study was conducted from the perspective of historical Anthropology in an attempt to answer these questions. It was during the Manchu Qing Dynasty that East Turkestan became "Xinjiang", and the Uyghurs enjoyed a high degree of autonomy as subjects of the Qing Dynasty. When the Qing dynasty collapsed, the inhabitants of the region sought to establish an independent state but failed due to international relations. The People's Republic of China denied the rights of the Uyghurs, which intensified the National=ethnic problem. This study elucidates such modern and contemporary history from the perspective of Central Asia.

研究分野：歴史人類学

キーワード：ウイグル 新疆 ジェノサイド 中央アジア ウズベキスタン カザフスタン 民族問題 区域自治

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

国内総生産(GDP)が世界第二位を占める程、強大化した今の中国はなぜ、自国の「自治区」と位置づけられている新疆ウイグル自治区に住むウイグル人を政治的に抑圧し、あらゆる先端的な科学技術を駆使して弾圧し続けるのか。パミール高原以東の東トルキスタン地域はいつから清朝の「新疆」となり、ウイグルという民族は如何にして出現し、現代「中国の少数民族」、「ウイグル族=維吾爾族」となったのか。

本研究はまず「新疆」の形成をめぐる歴史的、政治学的言説を史料に基づいて再検証し、そのうえで、現代中国の新疆ウイグル自治区で勃発しているウイグル民族問題の歴史的由来と性質、現状について民族学的考察を加える。

歴史的再検証と民族学的実態考察にあたっては、まず1884年の清朝による新疆省設置から1949年までを「新疆省期」、1949年から1976年までを「民族自治区期」、1976年から現在までを「民族問題勃発期」と呼んで可視化する。中国の民族問題というローカルな辺境地域紛争の歴史の変遷と現状について新たな知見を構築し、国際関係のなかにおけるグローバル・ヒストリーの進展に貢献する。

近代的な領土意識が芽生える以前はモンゴル系の遊牧国家、ジュンガル・ハン国がこの地に栄え、オアシスに暮らすテュルク系の住民をも配下において満洲人の清朝と対峙していた。清朝は1759年に天山南北を平定し、遊牧民のみならず、カシュガルのイスラーム政権をも征服して、「新しい疆土」を示す新疆が出現した。

ジュンガル・ハン国の滅亡によって無人化した地域に政策的移民が実施され、帝政ロシアの東進と大英帝国のインドからの北上を防ぐ目的で漢民族の入植が認められた。清朝に抵抗したイスラーム勢力を政権から排除する目的も兼ねて1884年に新疆省が設置された。新疆省の設置により、この地域が異民族からなる「藩部」ではなく、主権の伴われる「中国の一部」となり、「中国化」が次第に始まった(堀直,「新疆がどうして中国になったのか」,1999)。このように、新疆は、近代の国際関係のなかで形成された地域で、中国の固有の「一地方」ではない。

大方の歴史学者は近代に出現した国境線にとらわれることなく、テュルク系民族とモンゴル系遊牧民が古くから生活してきた東トルキスタンを中央アジアの一部と見なす(ウェ・バルトリド『中央アジア史概説』1966)。大国が角逐するグレート・ゲームの舞台となりだすと、アメリカの「歩く歴史学者」オーウェン・ラティモアは20世紀初頭から現代の新疆を「中国の内陸アジア辺境 Inner Asia Frontiers of China」と呼んで、清朝と中国による同地域への軍事的進出に注視した(Lattimore Owen, *Inner Asia Frontiers of China*, 1951;ラティモア『アジアの情勢』,1953)。これに対し、ハンガリー出身の歴史言語学者デニス・サイナーは「内陸アジアの東端」と定義し、中国の一部とするよりも、東トルキスタン即ち「新疆」とユーラシア世界の遊牧民との文明的関係、文化的一体性を強調する(Sinor Denis, “What is Inner Asia”, 1976)。

ロシア革命やこれと前後したユーラシア規模での汎テュルク主義(民族主義)の高揚の結果、1933年に「東トルキスタン・イスラーム共和国」が、1944年に「東トルキスタン共和国」が二度にわたって「新疆」で成立した(濱田正美,「トルキスタンの成立」,2016)。イスラームだろうと、社会主義制だろうと、現地の住民は中華民国の「新疆」よりも、独自の国家、東トルキスタンの創出に力を入れていた。

ソ連の関与もあって、政治的紆余曲折を経て中華人民共和国に編入された後は、新疆とウイグルという二つの名が冠された自治区、「新疆維吾爾(ウイグル)自治区」が成立した(寺山恭輔『ス

ターリンと新疆 1931-1949』)。名称から分かるように、それはあくまでも地域的・文化的自治であって、ウイグル民族の政治的権利が認められた自治ではなかった。

今日、新疆ウイグル自治区は「一带一路」という巨大な経済構想圏の要の地として世界中から注目されているが、同時にまた「自治区の主人公」と謳歌されてきたウイグル民族は実に 100 万人もの人々が再教育センターに強制収容されていることは欧米のメディアでエスニック・クレンジングとしてクローズアップされている。

なぜ、「古くから中国の固有の領土」である「新しい疆土」にウイグルという民族が創造されたのか。そのウイグル民族はどのような民族問題を中国との間で抱えるように至ったのか。汗牛充棟の壮観を呈する歴史学の成果を十分に再検証したうえで、民族学的手法を横断的に利用して民族問題の性質を探究する必要性を痛感し、研究しようと思いついた。

2. 研究の目的

社会主義国家の中国は建国当初、ソ連をモデルとして民族問題を完全に解決した、と宣言していた(熊倉潤『民族自決と民族団結:ソ連と中国の民族エリート』2020)。しかし、ソ連は結成した直後からロシア人のナショナリズムと諸民族の民族自決運動とが衝突し、ソ連邦解体の原因の一つとなった(エレヌ・カレール=ダンコース、『民族の栄光』上・下,1991)。中国も民族識別工作によって 55 の少数民族を創出して「兄弟民族間の平等」を演出したが、「兄貴」を自認する漢民族とは最初から不平等であったと指摘されている。また、ウイグルやモンゴル、それにチベットといった長い歴史を有し、人口の面でも数百万に達する民族と、近代に形成されたエスニック・グループで、人口も僅か数千人ないしは数万人の諸民族との間の「平等」も有名無実だったとの見方がある。

本研究は上で述べた現代史の背景に立脚したうえで、近代に形成された「新疆」という多民族混住地域の形成史と、ウイグルという「少数民族」を取り巻く中国の民族問題の解明を目的としている。

ウイグル人をはじめとする東トルキスタンに暮らす諸民族(モンゴル、カザフなど)からすれば、清朝崩壊後の中国は中国人即ち漢民族の民族国家である。歴史的にはモンゴル高原や中央アジアとの連帯感が強く、中国人と共に「中華民族」の一員になる意志は極めて希薄である。ウイグル人など中央アジア史の観点に立てば、マー・ワラー・アンナフル(アム川とシル川との間の地)から新疆までが広域のトルキスタンにあたる。帝政ロシアはステップとオアシスの住民を征服して 1867 年にトルキスタン総督府を設置したし(V.V.バルトリド、『トルキスタン文化史』I II,2011)、ソ連邦はそれを受け継いでテュルク系諸民族に共和国を建立させた。現代に入り、中国人の民族国家はひたすら他民族を自民族への同化を「文明化」と認識している以上、独立ないしは少なくとも高度の自治を獲得しようとしてきた歴史は、民族自決の歴史に変化していくのも当然である。

一方、中国から眺めると、「新疆」の出現は新疆省の設置に象徴されるように、異民族が暮らす藩部の中国化を意味する。ソ連国内では帝政ロシア期の「トルキスタン」の呼称は一時、忌避されたが、新疆に対しては「東トルキスタン」との名称を用い続けた。ではなぜ、ソ連は 1921 年に「東トルキスタン」の住民で、それまでは「回民」や「纏回」と呼ばれ、オアシス・アイデンティティを持つ集団に一括してウイグルとの呼称を与えたのか。どうして、同時期の中国も「新疆省の住人は維吾爾=ウイグル」だと承認し、ソ連と共通認識を抱くようになったのか。東トルキスタンなのか、それとも新疆なのか。これらの問題は未解決のまま中華人民共和国期に入り、1960 年代の中ソ対立期に激化する。ウイグル人などは中華人民共和国よりもテュルク系の

同胞の国、カザフスタンやウズベキスタンに親近感を抱く。自分たちより遥かに高度の自治を享受していると認識しているからである。

現在の中国では、ウイグル人の住む地域をめぐって、「中国の西域か、それともウイグル人の東トルキスタンか」との論争にまで発展し、民族問題として現れている(王力雄、『私の西域、君の東トルキスタン』,2011)。ウイグル民族問題を歴史的脈絡の中で分析するには、こうした歴史の変遷と民族政策を再検証する必要がある。

3. 研究の方法

上で示した背景と目的に沿うように、本研究は以下のような方法で推進してきた。

まず、ソ連によって認定された「ウイグル民族」を中国がそのまま承認した目的と経緯は何だったのか。ウイグル人はカザフ人やモンゴル人と共に独自の「東トルキスタン共和国」を建立したが(王柯、『東トルキスタン共和国研究』,1995)、中国への併合過程は決して解明されていない。この問題は中国がなぜ、ウイグル民族にソ連型の自治共和国の権利を付与せずに、単なる地域自治権にとどめたのか、という現代史の大きな謎でもある。

次に、中華人民共和国の成立後、少数民族は文化の面では「漢民族より立ち遅れ」、経済の面では「助けるべき弱い存在」であるという政府政策の下で、新疆ウイグル自治区でどのような政策が実施されたのか。ウイグル民族は政府政策を如何に理解してきたのか。こうした諸問題について、1949年から開始する「民族自治区期」に照準をあてて民族学的調査を実施した。具体的には主として、中央アジア諸国に1960年代に越境したウイグル人のコミュニティで複数回にわたって現地調査を進めた。聞き書きと文献の収集に努めた。

第三に、文化大革命が終息した1976年から現在までを研究代表者は「民族問題勃発期」と定義している。文化大革命が閉幕し、改革開放がスタートすると同時に、いわゆる「ウイグル人による民族分裂活動」が顕著になったと中国は一方向的に主張する。2001年9月11日の米国の同時多発テロ以降は、「ウイグル人によるテロ行為」が中国各地で発生したと報道されてきたし、中近東やアフガニスタンにもウイグル人ディアスポラの存在が確認され、民族問題の越境現象がクローズアップされるようになった。果たして現在の中国政府が推進する「一帯一路」巨大経済構想は新疆におけるウイグル民族問題の根本的な解決につながるのか。こうした諸問題について、トルコ共和国と台湾、それに米国にあるウイグル人コミュニティで調査を進めた。いずれも新疆ウイグル自治区から亡命し、形成された団体である。当初は新疆ウイグル自治区に入る予定であったが、政治情勢の悪化とコロナ禍の拡大により、調査が可能な同地域と隣接するカザフスタンとウズベキスタン、それに米国とトルコでの調査を優先とした結果である。

4. 研究成果

研究代表者はこれまで社会主義中国が東トルキスタンこと新疆を自国領と主張する際の思想教育の方法(楊海英、「現代中国における少年の洗脳方法—絵本小児書が描く辺境新疆の歴史と文化」,2013,9-37頁)について分析し、ウイグル人社会における文化大革命期の政治的粛清に関する第一次史料を刊行してきた(楊海英、「ウイグル人の中国文化大革命—既往研究と批判資料からウイグル人の存在を抽出する」塚田誠之編『中国の「国境文化」の人類学的研究』,2016,)。

また、新疆における漢民族の移民増加と屯田政策について調査し、成果を公開した(楊海英、「新疆西部辺境の屯田兵」,『「知識青年」の1968』岩波書店,2018,196頁)。一連の研究と史料公刊を通じて、中国は多民族国家、「民族団結」を標榜しながらも、少数民族であるという身分・立場は、マジョリティから危険分子として排除の対象とされている事実気付いた。例えば政府系シ

シンクタンクの研究者・馬大正は「国家利益はすべてを凌駕する」と提案し、ウイグル民族を「テロリスト」ないしはその予備軍として位置づけている(馬大正,『国家利益高於一切』,2003)。「開明的」知識人と一部で評価される葛兆光もマイノリティが「先進的な漢民族」への同化を理想的として、「少数民族の自然消滅」を予想する(葛兆光,『中国再考—その領域・民族・文化』,2014)。

このように、高揚する中国の漢民族の民族主義の思想的状況から、あらためて「新疆」の形成が中国と国際社会にとって意義と、ウイグル民族問題の歴史的淵源と現状について深く分析する必要性を痛感し、研究を進めてきた。具体的な成果の一つとして、研究代表者とウイグル人于田ケリムとの共著『ジェノサイド国家 中国の真実』を文藝春秋から新書として2021年10月に刊行した。研究代表者はこの共著書のなかでまずジュンガル・ハン国の滅亡に伴う「新疆」の出現から論じだし、新疆省の設置と漢人移民の具体的な増加、中華人民共和国への編入過程といった歴史のプロセスをウイグル人など現地住民の視点で再整理している。歴史的重要な時期における政府の民族政策とウイグル人社会へのインパクト、そしてウイグル人側の反応についても分析している。その際、中国政府が参考にし、政策の面で模倣していたソ連の民族政策との比較、中央アジア諸国における人的移動との関連性についても触れている。現在、ジェノサイドとまで指摘されている新疆ウイグル自治区における民族問題について国際関係と民族学の観点から解決の方向を示している。こうした学問的挑戦は、現在世界規模で起こっている地域紛争・人々の越境問題の解決にも寄与できよう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 Yang Haiying	4. 巻 50/1
2. 論文標題 “Choibalsan and Inner Mongolia: What did Marshal Choibalsan say to the political mission from Inner Mongolia?”	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Obshchestvo i gosudarstvo v Kitae (Society and State in China)	6. 最初と最後の頁 792-806
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.31696/2227-3816-2020-50-1-792-806	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 楊海英	4. 巻 Vol8
2. 論文標題 中央ユーラシア東部の文明史的興亡 ウズベキスタンのアラル海周辺を中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明』	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 楊海英	4. 巻 第15号
2. 論文標題 モンゴル国から収集したモンゴル語写本・木版本目録(中間報告書)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 アジア研究	6. 最初と最後の頁 3-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 楊海英	4. 巻 第15号
2. 論文標題 少数民族を描いた中国画像資料・連環画目録(中間整理報告)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 アジア研究	6. 最初と最後の頁 9-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 楊海英	4. 巻 第15号
2. 論文標題 少数民族を描いた中国のポスターの目録(中間整理報告)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 アジア研究	6. 最初と最後の頁 15-216
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 楊海英	4. 巻 243
2. 論文標題 描かれた神、呪われた復活	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 アジア遊学243)松原正毅編『中央アジアの歴史と現在』	6. 最初と最後の頁 148-165
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件(うち招待講演 4件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 楊海英
2. 発表標題 中国の少数民族弾圧 モンゴル・ウイグルのいま
3. 学会等名 神戸正論懇話会(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 楊海英
2. 発表標題 中国の民族問題 モンゴル・ウイグルの事例から
3. 学会等名 NPO法人・国際生涯学習センター(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 楊海英
2. 発表標題 中国によるモンゴル人ジェノサイドについて 過去から現在へ
3. 学会等名 一般社団法人・大阪倶楽部（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 楊海英
2. 発表標題 中国の民族問題 南モンゴルとウイグルの実例から
3. 学会等名 九州正論懇話会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 楊海英
2. 発表標題 2018年夏ウズベキスタン調査初期報告
3. 学会等名 アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明・第二回国際シンポジウム－アフロ・ユーラシアの現代動態（招待講演）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計9件

1. 著者名 楊海英	4. 発行年 2021年
2. 出版社 文藝春秋	5. 総ページ数 203
3. 書名 ジェノサイド国家 中国の真実	

1. 著者名 楊海英	4. 発行年 2022年
2. 出版社 風響社	5. 総ページ数 478
3. 書名 モンゴル人ジェノサイドに関する基礎資料14 絵画・写真・ポスターが物語る中国の暴力	

1. 著者名 楊海英	4. 発行年 2020年
2. 出版社 風響社	5. 総ページ数 326
3. 書名 『モンゴルの親族組織と政治祭祀 オボク・ヤス(骨)構造』	

1. 著者名 楊海英	4. 発行年 2020年
2. 出版社 風響社	5. 総ページ数 343
3. 書名 モンゴルの仏教寺院 毛沢東とスターリンが創出した廃墟	

1. 著者名 楊海英	4. 発行年 2020年
2. 出版社 徳間書店	5. 総ページ数 276
3. 書名 『世界を不幸にする植民地主義国家・中国』	

1. 著者名 楊海英	4. 発行年 2021年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 208
3. 書名 内モンゴル紛争	

1. 著者名 楊海英	4. 発行年 2021年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 416
3. 書名 紅衛兵とモンゴル人大虐殺	

1. 著者名 楊海英	4. 発行年 2021年
2. 出版社 風響社	5. 総ページ数 824
3. 書名 モンゴル人ジェノサイドに関する基礎資料13 - 加害者に対する清算から被害状況をよむ	

1. 著者名 楊海英	4. 発行年 2020年
2. 出版社 風響社	5. 総ページ数 984
3. 書名 モンゴル人ジェノサイドに関する基礎資料12 - モンゴル語政治史料	

〔産業財産権〕

〔その他〕

機関リポジトリ

https://shizuoka.repo.nii.ac.jp/index.php?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_snippet&index_id=1341&pn=1&count=20&order=17&lang=japanese&page_id=13&block_id=21

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------